

日本の口腔保健50年 At-a-glance

安藤雄一

Half-century trends in oral health in Japan at a glance

Yuichi Ando

キーワード：歯科疾患実態調査、日本人、口腔状態、推移、半世紀

歯科疾患実態調査とは

歯科疾患実態調査（以下、歯実調）は、1957年に第1回調査が行われ、以来、6年に1回の間隔で実施され、昨年（2011年）11月には10回めの調査が実施され、本年（2012年）6月に結果概要が厚労省のウェブサイトに掲載された（その後、2012年8月に最終報告が同ウェブサイトで報告された）。

歯実調の最大の特長は、長期間にわたって、ほぼ同じ方式で調査が実施されてきたことであり、半世紀余にわたる日本国民の口腔状態の推移を知ることができる点である。

平均値でみた現在歯数とその内訳

図1は、過去10回にわたる歯実調（1957～2011年）における年齢別にみた現在歯数とその内訳

（健全歯、未処置歯、処置歯）を乳歯・永久歯別に示したものであり、う蝕有病状況および歯の保有状況が大きく変化してきたことが一目で（at a glance）見て取れる。乳歯では、う蝕有病状況は歯実調が開始された当時から高く、う蝕のほぼ全てが未処置の状態であったが、処置歯の割合が少しずつ増え、1980年代からは有病状況も少しずつ低くなり、その傾向は今でも続いている。永久歯では、乳歯とは異なり、う蝕有病状況は調査開始時から増え続け、最近歯止めがかかってきた。また現在歯数も増加しており、各調査年のグラフの形状が三角形型から台形型に少しずつ変わりつつある。

「8020者」の割合と人数

図2は、2012年6月に厚労省から出された報道発表資料に示されていた図で、20歯以上保有している人の割合の推移（1987～2011年）が年齢階級別に示されている。

これをみると、国民全体で歯の保有状況が大きく改善していると受け取ることができる。しかしながら、人口構造の変化（高齢化）を考慮すると、このような解釈とは別の見方が可能となる。図3は、報道発表資料から後期高齢者のみに絞って、グラフに示された数値に人口を乗じ、実人数の推

【著者連絡先】

〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6
国立保健医療科学院・生涯健康研究部
安藤雄一
TEL：048-458-6283 FAX：048-458-6714
E-mail：andoy@niph.go.jp
受理日：2012年8月1日

日本の口腔保健50年 At-a-glance

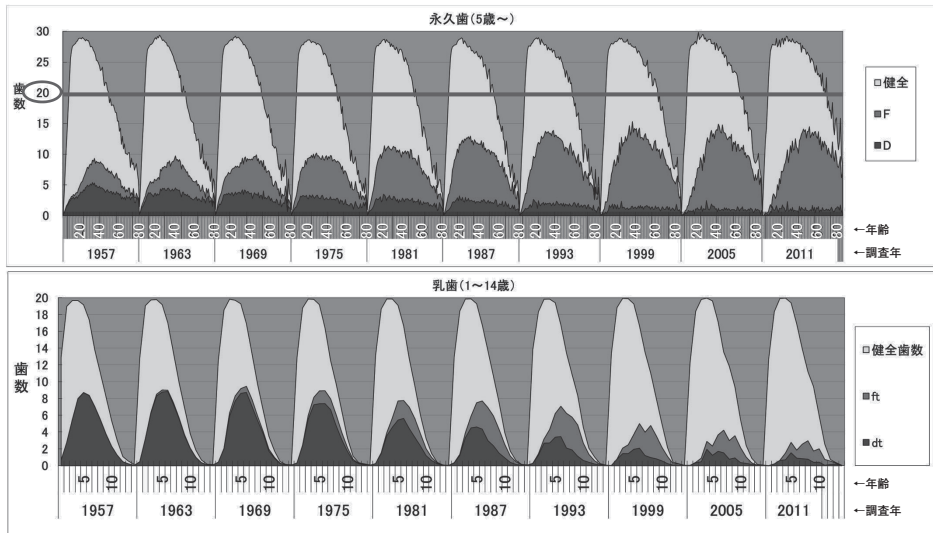


図1 歯実調 半世紀余の推移 (1957~2011年) 現在歯数とその内訳【平均値】

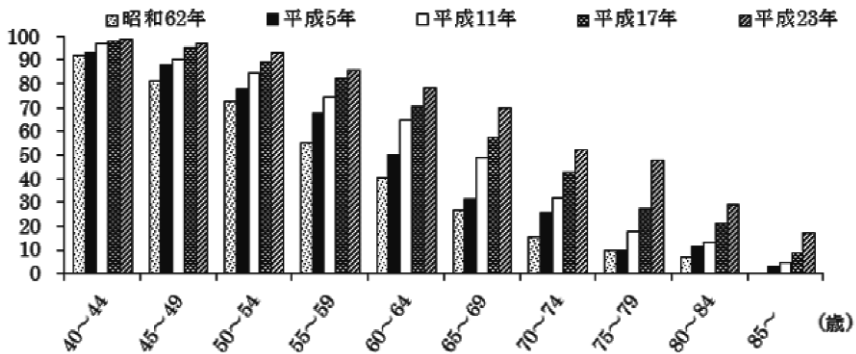


図2 20歯以上保有している人の割合の推移

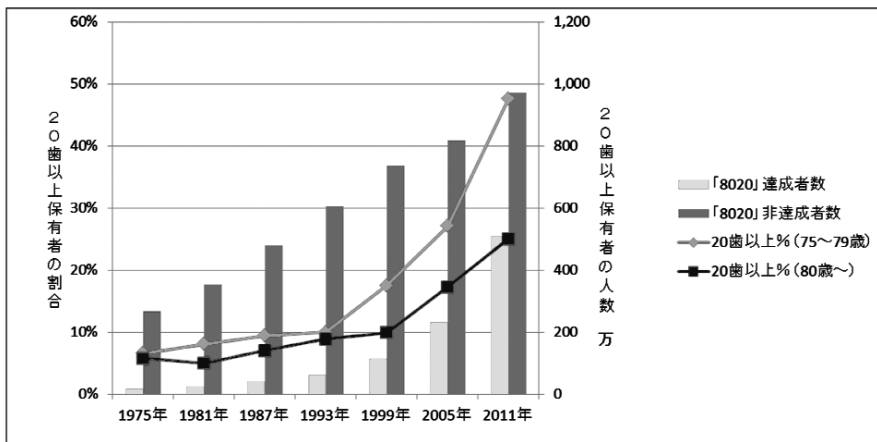


図3 「8020」の達成者：率と実人数（75歳～）～非達成者も増加中～

計値として「8020」の達成者と非達成者の推移を示したものであるが、「8020」の達成者数は急増しているものの、非達成者も増加傾向にある。その理由が高齢者の数が増えているためであるが、%や平均値だけに注目していると、肝心な点を見逃すことがあるので、人口の推移は常に念頭に置いて各種データをみる必要がある。

歯数の合計値でみた現在歯数とその内訳

図4は、図1の永久歯の部分について各調査年の人口データ（年齢別）を用いて全歯数（図中のΣ歯数）の推計値を算出して図示したものであるが、歯科疾患の有病状況の変化に人口構成の変化が加味され、この50年間で生じた大きな変化が見て取れる。ちなみに発表者（安藤）が歯学教育を受けていた時期（1981年）と最新データを比較すると、高齢者の歯の数が増え、かつ全体に占める割合も高くなっていることがひと目でわかる。

その他の項目の推移（いずれも平均値ないし割合）
1) う蝕（DFT）

図5は、う蝕有病状況（DFT）の推移を示したものである。一人平均未処置歯数（DT）は顕著な減少傾向が認められるが、一人平均処置歯数（FT）は調査開始時から増加傾向にあったものが、若い年齢層から次第に減少傾向に転じている。DFTはDTとFTの合計値であるため、数値が大きいFTに近い傾向を示している。

2) フッ化物歯面塗布、シーラント、歯みがき回数

図6はフッ化物歯面塗布を受けた経験のある小児（1-14歳）の推移を示したものであり、一貫して増加傾向にあり、最新調査では経験ありが約3分の2を占めるに至っている。

図7は、一人平均シーラント歯数の推移を示したものであり、顕著な増加傾向を示しており、最新（2011）調査の5-14歳ではDFTよりもシーラント歯数のほうが多くなっている。

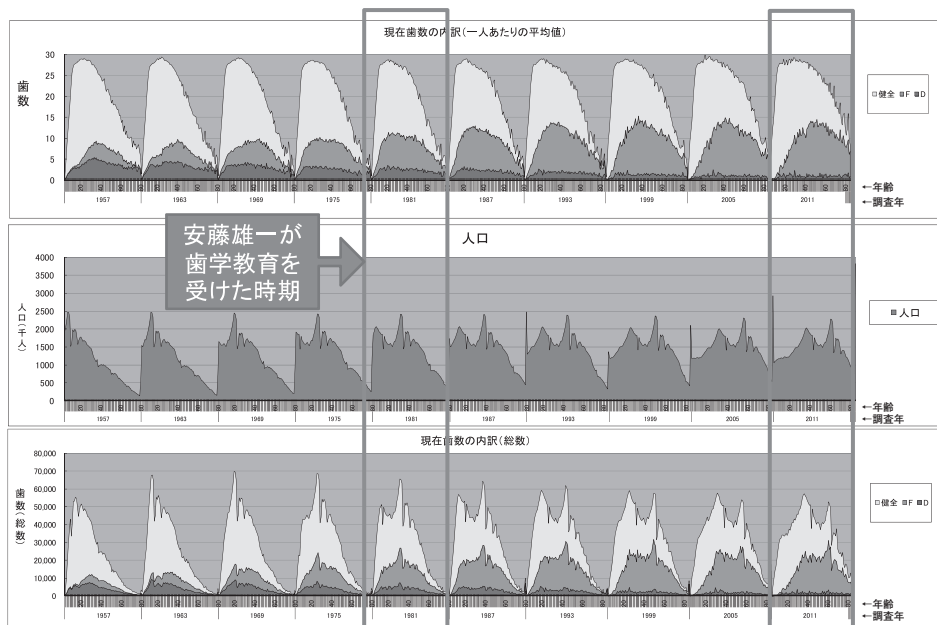


図4 現在歯とその内訳 Σ歯数でみると？

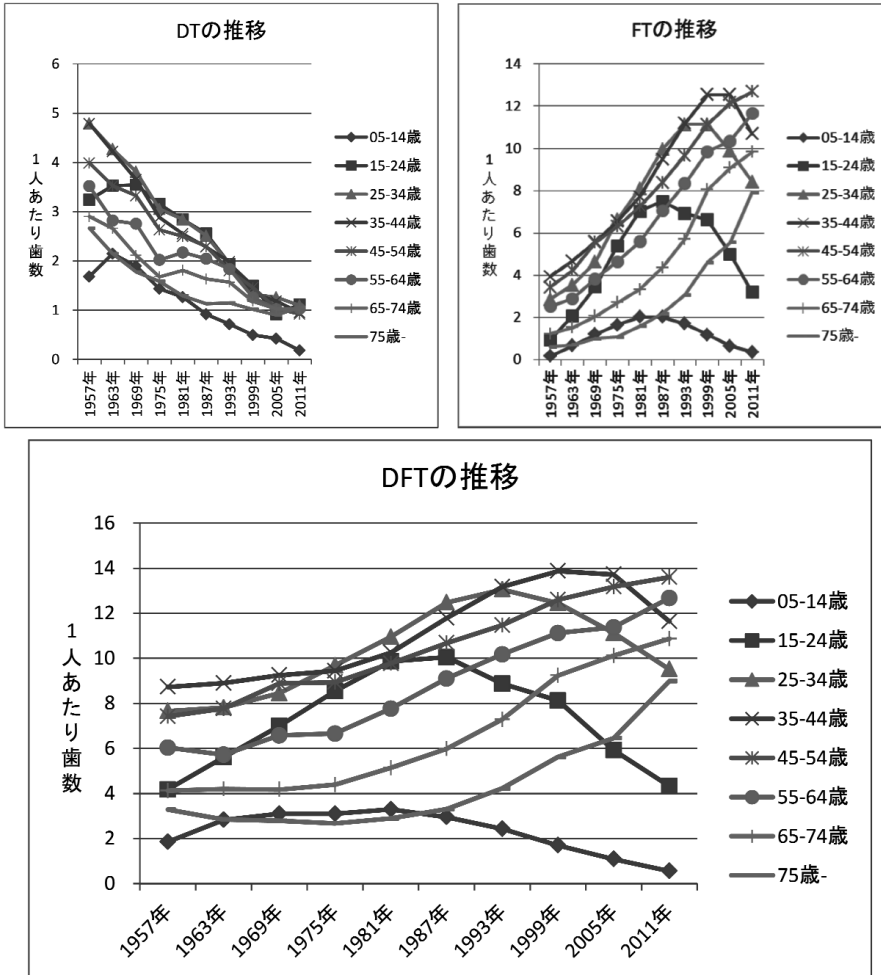


図5 う蝕（DFT）の推移

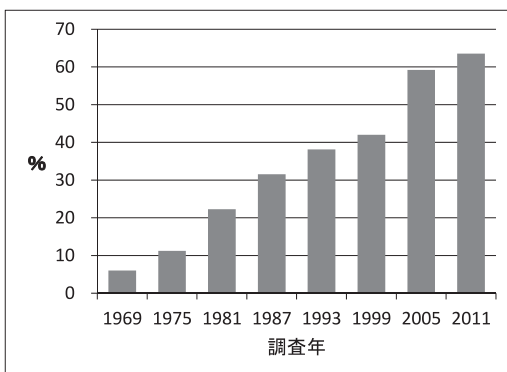


図6 フッ化物歯面塗布経験者の割合の推移 (1969年～、1～14歳児)

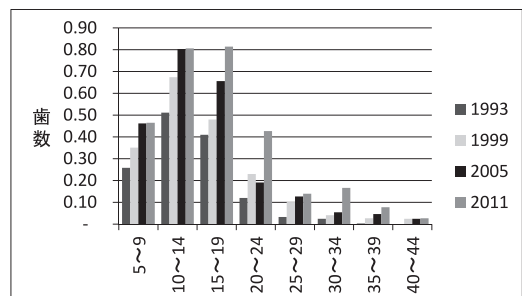


図7 一人平均シーラント歯数の推移 (1993年～)

図8は、歯磨き回数の推移を示したものであるが、歯磨きの励行状態は向上する傾向が認められている。

3) 歯周疾患

歯周疾患については、診査基準が一貫していなかったことから、残念ながら、う蝕のように半世紀にわたる推移を知ることができない。最新(2011年)調査では、前回(2005年と)と同じ診査基準(CPI)が用いられたため、歯科疾患実態調査では史上初めて歯周疾患の推移をみるができる。図9は歯周ポケット(CPI3~4)を有する人の割合を示したものであるが、比較的若い年齢層では最新調査(2011年)が前回(2005年)調査よりも低い値を示しており、歯周疾患も減少傾向にあることが窺える。なお、高齢者では最新(2011年)調査が前回(2005年)調査より増加しているが、これは現在歯数が増えた影響であり、

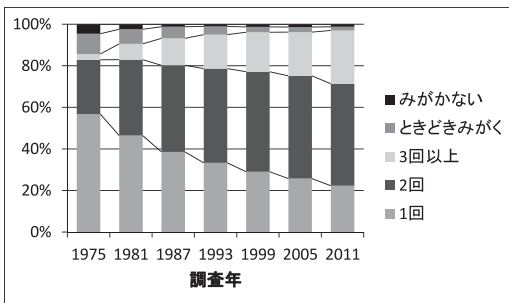


図8 歯みがき回数の推移 (1975年～)

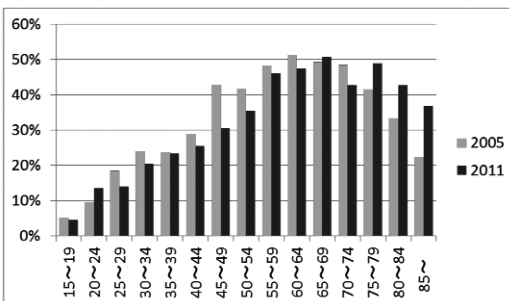


図9 歯周疾患：CPI3以上の割合の比較 (2005 vs 2011)

その影響を除くと比較的若い年齢層と同様、減少傾向が認められている。

歯実調における対象者(調査協力者)数の減少について

最後に捕足として、歯実調における対象者(調査協力者)数の問題について触れる。

歯実調の対象者(調査協力者)数は、回を重ねるごとに減少する傾向にある。図10は対象者数の推移と、過去の推移から算出される予測値を示したものであり、最新(2011年調査)では3,288人と予測されたが、実績値はこれを約千人上回る4,253人であった。予測値を上回ったのは、今回、厚労省歯科保健課のほうで、いろいろと対策を講じた1つの成果と考えられるが、減少傾向は引き続きしており、今後に向けた大きな課題である。

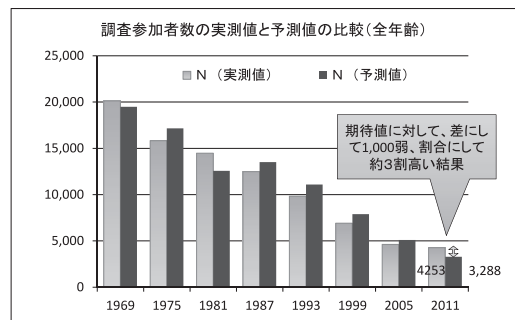


図10 歯科疾患実態調査の問題点
対象者数は予測値(3,288人)よりも約千人多かったが…

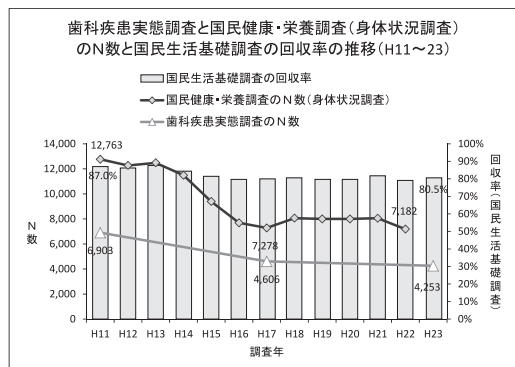


図11 調査協力：他調査の動向

しかしながら、調査協力者数が減少している問題は、歯科疾患実態調査に限った問題ではない。図11は、歯科疾患実態調査の基盤となる調査である国民健康・栄養調査（身体状況調査）の対象者

数と国民生活基礎調査の回収率の推移を示したものであるが、いずれも減少傾向を示しており、これが歯科疾患実態調査にも影響を与えている。

Half-century trends in oral health in Japan at a glance

Yuichi Ando

(Department of Health Promotion, National Institute of Public Health)

Key Words : National Survey of Dental Diseases, Japanese people, Oral health, Trend, Half century

The tenth National Survey of Dental Diseases (NSDD) by Ministry of Health, Labour and Welfare in Japan was carried out in 2011. This survey has been carried out every 6 years since 1957 and has basically employed almost same criteria. Therefore, NSDD offers us information about the half a century trends in oral health of Japanese people. My presentation outlined these trends.

Prevalence of dental caries in deciduous teeth was very high from 1957 (the first survey) to 1970's. However, it decreased since 1990's. Unlike deciduous teeth, prevalence of dental caries in permanent teeth had increased after the first survey (1957) until 1980's. However, it has subsequently decreased and the trend still continues. As in the case of deciduous teeth, the rate of filled permanent teeth has increased since the first survey in 1957. On the other hand, the rate of decayed teeth has decreased. Average number of present teeth per elderly people has increased since 1980's. Therefore, the rate of elderly people having more than 20 teeth increased remarkably. However, considering the increase of aged population in Japanese society, numbers of elderly having less than 20 teeth has increased. We have to pay attention to population-based change.

Other findings are as follows: The rate of children having experience of topical fluoride application has increased; Average number of teeth having experience of treatment of pit and fissure sealant increased; Average number of daily tooth brushing increased; Small decrease in the rate of adults having periodontal pockets was observed in latest survey; The number of subjects of NSDD has decreased.

Health Science and Health Care 12 (1) : 33 – 38, 2012